

『いっしょけんめい笑懸命』

作者 浅羽 一

正直に言つて、僕はずっと馬鹿にしていた。それは単に、とつとくに老齡を迎えた大人が、いくら目が不自由だからと言つていつまで経つても隠居もままならず場末の銭湯で客の背中を流すなんて仕事を続けていたから、と言うだけでなく、もつと端的に役に立っていないと思つていたからだ。それは社会的にのみならず、国の、ひいては人々の平和の為に。

戦争はもうずっと続いてきた。それは僕の父親がまだ僕と同じくらいの年齢だった頃に始まつたらしいが、きっかけや原因については僕の父親もそのまた父親もあまり多くを語ろうとしなかつた。或いは、語りたくても語れなかつただけかも知れない、と今になつてしまえば考えることも出来る。少なくとも僕は三度、情けなくも戦争を批判していた臆病な大人―としか当時は思つていなかった―が憲兵に連れて行かれる光景を目にしていた。

一番上の兄が「この国の為に」と青空に魂を上らせたのは、僕がまだ三つにも満たない頃だった。二番目の兄が同じくその身を「家族の為に」と捧げてくれたのは、僕がようやく物事を理解できるようになった七歳の時だった。唯一の姉が僕を除く家族の誰にも知られないよう想いを寄せていた二件隣の次男坊が、満月の晩に「君の為に」と姉に笑つて別れを告げたのは、僕がちょうど十歳になる前日だった。僕は今でも、本当は泣きたかつただろうに、「お誕生日おめでとう」と満面の笑みを浮かべてくれた姉の声を覚えてる。その時の姉はいつにもまして饒舌で、祖母と母と姉の三人で最後の男となつた僕の為に用意してくれた精一杯のご馳走を取り分けながら、「たくさん食べて大きくなりなさい」と何度も何度も繰り返していた。僕の元にそれが届いたのは、それから三年後の誕生日の翌々日だった。

たつた一枚の紙しか入っていない封筒を受け取つたのは、腰の曲がつた祖母で、その夜にそれを見た母はさらにその身を丸めて泣いていた。だけど僕は、そんな二人を前にして、笑つていた。誇らしかつたからだ。早く大人になりたいと、大人になつて家族の役に立ちたいと願つていた自分に、ようやく順番が回つてきたのだと、まるで疑いもせず信じていた。そんな僕を、一足先に大人になつていた姉は何とも言えないような笑みを浮かべて見つめていた。僕が軌道修正用の小さな尾翼しか持たないミサイルに乗ると記された日は、それからおよそ三週間後の予定だった。

操縦訓練は厳しかつた。方法自体は単純なものだったが、何よりも絶対に失敗してはならないという義務感が僕たちみたいな新米のみならず教官を含めた訓練所全体を支配していた。僕たちにとって必要なものは、撃ち出されたミサイルの落下地点の誤差を調整する操縦桿、確実に目標を睨み付けて放さない目、それから覚悟だけだつた。

教官は最初に言つた、何があつても目をつぶるなど。お前たちが恐怖に負けて目をつぶれば、お前たちの守るべき人々の瞳が永遠に閉ざされることになるだろうと。

教官はさらに言つた、決して臆病風に吹かれて操縦桿から手を放すなど。お前たちが握つているのは単なる機械でなく、この国の未来そのものだと。

教官は最後に言つた、お前たち一人一人が皆等しく文字通りこの国の繁栄の礎になるのだと。だからこそ、最後は恐れず立派に笑つて向かつて行けと。

おそらく、あの時、あそこにいた僕たちの誰一人として、疑つていなかった。自分たちはきつと必ず間違ひなく、最後の最後まで勇猛果敢に笑つて敵に突つ込んでいくのだと。死ぬのが怖いと泣くなんて、そんな奴は自分を含めてはいるはずがないと。

間違つていた。

あと十日という頃になるまで、まだかまだかと指折り数えていた。残り一週間という頃になって、残った日にちを数えるようになった。

三日前に家族と最後に会った時、唐突にわき上がった恐怖心を誤魔化すのに苦労した。出撃を二日後に控えた昼、教官が「明日はお前らを風呂に連れて行ってやる」と言った。それは本当に文字通りの銭湯で、今更、男同士で風呂に入りたくないなんて思っていない。たはずなのに、気づけば僕たちは一斉に歓喜の雄叫びを上げていた。

翌日の晩、出撃前夜、連れて行かれたのは例の年老いた三助のいる銭湯だった。そして僕たちは教官の指示で脱衣所の中で裸のまま整列し、数人ずつ、限られた時間であったもののゆっくりと湯船につかり、そして皆、盲目の老人に頭と背中を洗われた。

泡まみれの坊主頭に触れられた手は大きかった。だけど乱暴さはなかった。むしろ、驚くほどに優しくかった。どうしてだか、僕は父を、そして兄たちを思い出した。勝手に溢れる涙を隠したくて、何度も何度も顔を両手で洗う振りをした。彼は僕の頭の泡はそのままに、今度は我知らず小刻みに震えて止まらない肩に片手を置き、ごしごしと背中を布でこすりだした。上から下に、下から上に、柔らかくも力強く彼の手は僕の背中を往復した。

決して恐怖心が消え去ったわけではなかった。でも、確かに、震えはいつの間にか訓練でこびりついた垢とともに背中から流され消えていた。そして僕の体はもう彼の手に応えて動くだけで、その感触はまるで力一杯に背中を押されているようだった。最後にざばつとお湯をかけられて、ぱんぱんと背中を二回叩かれた時、僕はもう泣いておらず、素直に深々と頭を下げて感謝を告げることが出来た。中には時折声を漏らす者もいたが、もう誰もそれを恥とは思わなかった。そして最後、僕たちはさして大きくない浴槽ですし詰めのごとく膝を抱えて熱い湯に浸かり、全員で百まで数えて風呂を出た。銭湯を後にする時、その主人と三助の老人がずっと僕たちの背中を見送ってくれていた。僕たちは改めて、一糸乱れぬ動作で彼らに敬礼をした。それが、僕たちにとって最後の夜の思い出だった。

そして遂に、その翌日、つまりは今日、僕たちはこれから敵陣に向かって空を飛ぶ。天は高く、青く、戦略的にはともかく気分的にはまさしく天晴れな清々しさだった。

見送りの人間はいなかった。薄情なのではない、全員がすでに別れを済ましていたからだ。笑って死に行くべき僕たちにとって、後ろ髪を引いてくれる相手はありがたくも恐ろしい存在だった。だからこそ僕もまた、家族から差し入れられた全てを教官に託し、唯一、父や兄たちも一緒に笑っている家族写真のみを握って隊列に加わった。そこに写る僕はまだ乳飲み子のように幼くて、そんな自分も今ではこうして大きくなったと、気恥ずかしさと誇らしさと感謝の気持ちがあわてきた。それだけで、十分だった。

棺桶さながらに狭い機体に体を押し込め、順番を待つ。

発車の直前、教官がそれぞれの機体を覗き込み「縛るか」と聞いてきた。僕はそれに「いいえ」とはつきり答え、力一杯に操縦桿を握りしめた。教官はしっかりと頷き、僕の肩を叩いてから機体の風防を外から閉じた。そして僕はもう、前だけを向いた。

号令が響いた。だから僕は腹の底から声を出した。

轟音とともに衝撃が走り、次の瞬間には雲が横にいた。

あつという間に流れる白。視界全部に広がる青。激しく震える操縦桿を思い切り握り。そうして僕は肺一杯に息を吸い込んで、全力で笑って、笑って、笑ってやった。